

渡邊倭文子・その他 共著『ことばの育ちに寄りそって

……小さなスピーチクリニックからの伝言……』に寄せて

「ことばの育ち」に立ち返る人たち

鈴木 比佐雄

渡邊倭文子さんは、一九五九年に言語の臨床の実務に就き、一九七五年に我孫子市に言語の発達が遅れている子どもたちのために「小さなスピーチクリニック」を開いた。この「渡辺スピーチクリニック」に多くの親御さんと子どもたち、そして後輩となるST（スピーチセラピスト）が集って来た。本書は言語指導の臨床的な専門書でありながらも、渡邊先生を慕う人びとの半世紀にわたる交流の物語と読むことが出来る。また編集者たちの前書きにある次の言葉によつて障害児教育は特別なものではなく普遍性を持つた考えであることが明示されている。〈特別な配慮を必要とする教育〉(Special Needs Education)は、教育の原点とも言われています。子育て全般にも応用できる実践的な知恵です。このような「ことば」が切実に欲せられる時の知恵が本書には随所にちりばめられている。渡邊先生の喜寿と五十年の活動を祝つて出された本書には、戦後の言語指導を切り拓いてきた悪戦苦闘した歴史が記されている。その言語指導の臨床現場の多様な経験は、言語障害児の関係者だけでなく、世界中で言葉を巡つて様々なストレスが引き起こされている現代社会において、「言葉」の原点に立ち返る大きなヒントがあると私には考えられた。

「ことばの育ち」とは何を意味しているのだろうか。ST（スピーチセラピスト）たちは「ことば」を「言葉」を生み出すための「気持ちの伝え合う」領域が必要不可欠であると考えているようだ。本書を読んでみてその臨床的な言語指導の考察から、私は「言葉」が成立するまでの基底に、実はやわらかな「ことば」の領域があるのではないかと知らされた。何らかの脳や身体的な障害で「ことば」の発達が遅れている子どもたちが存在してきた。親御さんにとつて見れば子どもが社会生活を営んでいく上で「言葉」が発達できなければ、生きていけないと考えることは最も切実な課題である。そんな親御さんや子どもたちの切実な悩みを受けて、言語指導を行うのがSTといわれる存在である。このSTという言語指導の専門家たちの歴史は戦後からでまだ半世紀しか経っていない。また国家資格としてSTである「言語聴覚士」が制度化されたのは、一九九七年であり、まだ二十年にも満たない。そんな渡邊先生の実践的な論考を紹介してみた。

渡邊先生の論考に入る前にある、「子どもの発達支援を考えるSTの会」代表の中川信子氏の序文に触れたい。中川氏は二〇一〇年現在において言語聴覚士の有資格者は一万七千人に達していて、「言語訓練のスキルやハウツーはよく知っているものの、臨床家としてもっとも大切な『思想』に欠けている言語臨床家が増えている憂うべき現実」があると指摘している。そのような状況の中で本書にはその「もっとも大切な『思想』が息づき、言語の障害を抱える現実に立ちすくむ親御さんや関係者たちに大きな示唆を与えることを書き記している。

渡邊先生の論考「小さなスピーチクリニックからの伝言」は序章と四章を合わせた五編から成っている。序章は一九五〇年代後半に「言語障害児を持つ親の会」の全国的な運動によつて「言語障害」という概念が一般化していき、一九五八年に仙台市の小学校、一九五九年に千葉市の小学校で「言語障害治療教室」が認可された。渡邊先生は一九五九年から中央吃音学校の言語発達遅滞部門（一九六四年から東京スピーチクリニック）で実務に就き、一五年間勤務した後に一九七五年に我孫子市に渡辺スピーチクリニックを開設した。二十三年間の言語指導の活動を止めて一九九八年に公には閉所したが、関係した子どもたちのアフターケアを現在も続けている。私は渡邊先生の略歴の中に言語指導の「もつとも大切な『思想』」が秘められているように感じられた。それは言語障害を抱えている子どもたちの人生を見守り、その子どもがより良い人生を歩んでいけるように、他者に自分の意思や思いを伝える具体的な「ことば」の習得を助言し続ける覚悟なのかも知れない。

第一章〈ことばの育ち〉を促すために、は四項目からなっている。(1)の「発達の固有の時間を受けとめる」に書かれている最も重要なことは、「子どもの障害について、自分を責めることが大切です」と親御さんのこれから長い子育ての真実を率直に伝えていることだ。例えば「この子はいつても良い人との出会いがあつて、幸せな人生を送ることが出来る子だ」と前向きな子育てに頭を切り替えて、どのように「良い環境」を作り、「雨だれが岩を穿つような根気」を持つて生きていくことだと語っている。また(3)の〈ことばの育ち〉には、「気持ちの伝え合い」を成立させるための言葉を「ことば」として積極

的に位置づけて原点としていることが分かる。渡邊先生を含めた言語聴覚士たちの「ことば」は、「気持ちの伝え合い」を促す手段としての言葉を意味して、あえてひらがなで記されているのだろう。まえがきで記されていた「特別な配慮を必要とする教育」(Special Needs Education)が、教育の原点とも言われていることは、渡邊先生の実践してきた「気持ちの伝え合い」こそが、人間にとつて最も重要なことであることと重なってくる。また渡邊先生は客観的に親御さんが、我が子に愛情を持つて「ことばかけ」をし続け、一人の人格ある他者として接して、良き人生を送れるような環境づくりをするパートナーやアドバイザーとなるように促している。

その後の(4)の「ことばかけの8つの注意点」や第二章「課題の解説」、第三章「学齢期」、第四章「成人期 社会参加の6つの課題」を詳しく論ずるスペースはないが、障害のある子どもへの弱点を客観的に理解しながら、それ以上に「ことば」の大切さを理解させて基本的な生活習慣を身に付け、その子どもの長所を伸ばしてあげて、多様な価値観の中でより良き人生を生きていくための成長に合わせた繊細で具体的な方法である。また渡邊先生が親御さんや子どもたちに伝言する、他者に感謝し他者から感謝されて、愛し愛される人間関係を築くための人生哲学であると、私には読むことが出来た。

またII章「保護者からの立場」の中に親御さんからの言語障害を抱えた親御さんたちの真実の「ことば」があり、私はその「ことば」に込められた心情にとても感動した。安部理恵子さんは重度自閉症の十五歳の息子さんについて「息子は障害があり特別なニーズはあるけれど、一人の人間であり、大切な我が子が出ていると感じた。

病に伏せている小学校の恩師に絵手紙を届け続ける優しい表現者に成長したと娘の心の成長を伝えている。それから裏表紙の日笠さん親子と野木さん親子の写真は、詩人でカメラマンの柴田三吉さんが撮影してくれた。その時のことを「撮影日記」という題で野木さんの文章の後に書いている。その締めくくりの言葉は「お二人の、やわらかい心が少しでも写っていればと願う」だった。私には柴田さんが二人の心だけでなく、二組の母子が様々な困難を克服してきたゆるぎない信頼観を自然に写し出していると感じた。

第三章「当事者の立場から」は二人から今の活動や暮らしぶりが報告された。第四章「臨床家として」では六名の臨床家たちが渡邊先生から学んだことを率直に語り、今自分たちが置かれている臨床現場の問題点や課題を記している。渡邊先生の「ことばの育ち」の思想・哲学は、渡邊先生が想像する以上に広く深く次の時代に引き継がれようと思われている。言語障害の関係者だけでなく、私の関係する詩人、作家、評論家、ジャーナリストなど言葉を書くことの専門家たちにも読んで欲しいと願っている。ADHD（注意欠陥・多動性障害）などの症状は、有り余る高機能の表現能力を持つ詩人や作家の中にもたくさん該当者がいるかも知れない。障害者の中にも様々な芸術家たちが生れてくる土壌や環境があることを知るだろう。きつと多様な価値観を認め合い真の「ことば」や純粋な芸術精神に立ち返る機会をこの書は与えてくれるだろう。

子なんだと気付くことができ心が揺らがないことに感謝し、置かれた場所で咲く幸福をかみしめています」と日常のペースを育ててくれた関係者への感謝と掛け替えのない子どもへの思いを語っている。十五歳のダウン症のお嬢さんがいる菅野弘美さんは、「発達曲線がなだらかな子ども達です。ぜひ長い目で育てていってあげて下さい」と子どもたちの固有の成長時間の大切さを伝えている。ダウン症の十七歳の女子高生がいる鈴木恭子さんは「本当に明るく楽しい人生を過ごして欲しい」ということが、私達家族の願いであるので、「愛される娘」で居られるよう、私達も努力していきたいと思っています。」と子どもの幸せだけを願う親心を伝えている。多動性だったが高校を卒業し今は就職している息子さんをもつ鈴木太美さんは、へ沢山頂いた、アドバイスの中でも最も強く心に残り、常に心がけたいと思つてまいりましたが「第三者の目で自分の子どもを見る目を養う」というものです」というアドバイスを心の拠り所にしていた。ADHDとLD（読字障害）でありながら介護とデザイン専門学校も卒業し就職活動をしている息子さんを持つ西岡史江さんは、「私が渡邊先生から学んだことの中で一番に皆さんにお伝えしたいのが『諦めないこと』です。諦めたらそこで終わってしまいます」と不屈の精神を教えてください。本書力バード写真の刺し子作家である野木泰宏さんの母の野木律子さんは、「さしこに出遭つて二十六年、今ではスポーツを楽しむながらゆつくりと親子でさしこ縫いを続けています」と淡々と語っている。陶芸作家になつた日笠明子さんの母の弘子さんは、「娘の陶芸歴は長く、二十一年に近くに及び」、「我孫子手づくり散歩市」に毎年出品し、「個展」も開くことができ、また